



Data

監督・脚本：瀬々敬久
原作：吉田修一『犯罪小説集』（角川文庫刊）より『青田Y字路』『万屋善次郎』
出演：綾野剛／杉咲花／佐藤浩市／村上虹郎／片岡礼子／黒沢あすか／石橋静河／根岸季衣／柄本明

👁️👁️ みどころ

人気作家・吉田修一の『犯罪小説集』からの2本の短編を原作とし、次々と社会問題提起作を発表する瀬々敬久監督が脚本と演出を。しかし、ネタが犯罪小説なのに、タイトルがなぜ『楽園』に？

綾野剛、佐藤浩市という日本を代表する看板俳優には弱者のイメージは似合わないが、瀬々脚本の中で2人はいかなる弱者ぶりを？他方、若手のトップ女優・杉咲花も明るい前向きの役が似合うはずだが、いかなる弱者ぶりを？

それをしっかり確認したいが、同じ限界集落に生きていても、男女の違いは顕著。そしてまた、『ジョーカー』（19年）の“誕生秘話”との違いも顕著だ。

『ジョーカー』も決して後味のいい映画ではなかったが、それは本作も同じ。もともと、本作でも、紡だけには多少の希望が・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■原作は？監督は？俳優陣は？テーマは？■□■

人気作家・吉田修一の「力量」は、いずれも李相日監督によって映画化された『悪人』（10年）（『シネマ25』210頁）と『怒り』（16年）（『シネマ38』62頁）を観れば明らかだ。『楽園』と題された本作の原作は、その吉田修一の2つの短編小説。1つは『青田Y字路（あおたのわいじろ）』で、これは田園から続くY字路で起きた少女失踪事件が周囲の人たちの運命を狂わせていく物語。もう1つは『万屋善次郎（よろずやぜんじろう）』で、これは周囲とのささいな行き違いが孤独な男を狂気へと駆り立てていく物語だ。

他方、瀬々敬久監督は『64・ロクヨン 前編 / 後編』（16年）（『シネマ38』10頁、17頁）で大ヒットを飛ばした後、『菊とギロチン』（18年）（『シネマ42』158頁）でも鋭い社会問

題提起をした人気監督だ。さらに、本作に主役級で登場する中村豪士（たけし）役の綾野剛は、『怒り』でも『64・ロクヨン 前編 / 後編』でも好演した、当代人気No.1の俳優。そして田中善次郎役の佐藤浩市は、『64・ロクヨン』で圧巻の演技を見せた日本を代表する俳優だ。そして、湯川紡（つむぎ）役の杉咲花は、『湯を沸かすほどの熱い愛』（16年）（『シネマ39』28頁）で第40回日本アカデミー賞最優秀助演女優賞、新人俳優賞を受賞し、現在最も注目を浴びている若手女優の代表だから、本作の俳優陣は超豪華だ。

本作のテーマはズバリ弱者。したがって、本作の舞台は、差別と格差が都会以上に顕著になる地方の小さな村、ハッキリ言えば限界集落だ。アメコミの悪役であるジョーカーの“誕生秘話”を描いたトッド・フィリップス監督の『ジョーカー』（19年）が第76回ベネチア国際映画祭で金獅子賞を受賞したことには全世界が驚いたが、同作のテーマもズバリ弱者だった。厳しい格差社会の中で最底辺に生きる弱者だった主人公は、なぜ、どのようにして、ジョーカーという凶悪な存在になっていったの？同作はそれを鋭く描いていたが、さて、『楽園』と題された本作における、3人の主人公たちの弱者ぶりは？

■□■ 2つの短編小説を瀬々監督が1本の脚本に！ ■□■

『青田Y字路』とは何とも奇妙なタイトルだが、スクリーン上に登場する、とある「限界集落」のY字路は本作の主役ともいえる座を占めるほど重要なポイント。ある日仲良しの愛華（あいか）と紡（つむぎ）が学校の帰り道にそこで別れた後、愛華が行方不明になってしまったから大変。愛華の祖父で、村の世話役でもある五郎（柄本明）をはじめとする村人や警察の懸命の捜査にもかかわらず、ランドセル等が発見されたものの、愛華は行方不明のまま。以降五郎はずっと立て看板を立てて目撃情報を求めているが、何ら有力な情報はないままだ。それから12年後、紡（杉咲花）はあの村を出て東京の青果市場で働いていたが、あの時、なぜ自分は愛華と別れたの？という“罪悪感”を背負ったまま生きていた。五郎からの罵声や冷たい視線に耐えきれず、学校卒業後とにかく村を出たというのが真相らしい。他方、村には片言の日本語しかしゃべれない中国かフィリピンかは分らないが東南アジア系と思われる外国人の母親（黒沢あすか）と暮らす内気で孤独な青年中村豪士（たけし）（綾野剛）がいたが、こんな田舎ではこの母子は完全に異質な存在。村人たちは口には出さないものの、今でもこの豪士が愛華失踪事件の犯人ではないかと疑っていたから、この母子も大変だ。

そんな老人ばかりの限界集落に父親を看取るために東京から戻り、今も一人で住みついている男が田中善次郎（佐藤浩市）。大柄で無愛想な男だが、村の中では相対的に一人だけ若く、何かと必要な村の雑用を引き受けていたから、結構重宝な存在だ。妻には病気で先立たれたそうだが、一人暮らしには不自由していないようだ。そんな善次郎も愛華失踪事件の時にはY字路に駆けつけていたから、事件の推移はよく知っているが、さて12年後の彼は？

本作導入部での物語全体の提示はざっとこのようなものだから、その後の展開を「刑事モノ」「推理モノ」にすれば、韓国映画『殺人の追憶』(03年)、『シネマ4』240頁)のようにも構成できるが、ふたつの原作を1本にまとめた瀬々脚本は、時計の針を一気に12年後に進めるとともに、そこで新たな第2の事件を発生させることに。さあ、第2の事件とは？

■□■瀬々脚本は3人の主人公をいかに設定？前作と同じ？■□■

本作第2の事件は『青田Y字路』のハイライトになるもので、豪士に大きな悲劇が訪れるが、それは一体なぜ？また、なぜあの時・・・？ずっとそんな罪悪感を抱えたまま東京で一人暮らしをしている紡の下には、紡に好意を寄せている同級生だった野上広呂(村上虹郎)が近づいてくるが、この2人は恋模様発展していくの？どうも、それはなさそうだが・・・。

他方、本作第3の事件は善次郎を主人公とした『万屋善次郎』のハイライトになるもので、そこでは、養蜂業を営んでいる善次郎が作るハチミツによって「村おこし」をしようとの提案を巡って善次郎が孤立していく姿が描かれる。すれ違いが生じた発端は、村の有力者に相談しないまま、善次郎が勝手に村役場との交渉に動いたため。しかし、それは雑用で年長者を煩わせまいと善次郎が考えたため。ところが、何かと陰湿で閉鎖的な村社会では「村八分」にされてしまうと・・・？それによって孤立してしまった善次郎は以降、亡くなった妻のマネキンを家の前に並べる等々の奇行が目立ち始め、遂にある日、あるとんでもない行動に出ることに。

このように本作の3人の主人公のうち少なくとも豪士と善次郎は、何とも悲惨な人生の結末を迎えてしまうことになる。しかし、本作を観ていれば、それが本人たちのせいではないことはハッキリしている。すなわち、豪士の場合は外国人差別(=蔑視)というハッキリした現実があるし、善次郎の場合は村の掟を破った村八分の男と言う烙印が光っているわけだ。それに比べれば、紡の場合は愛華の祖父からの執拗な敵視という現実があるものの、そこからの逃亡は容易。しかし、愛華に申し訳ないと思う自分の心の中の負い目からは容易に逃れられないから、紡も自分には幸せな人生などあり得ないと考えていた。

『64-ロクヨン-』では誘拐事件の展開の中で鋭い人間模様の分析をみせた瀬々監督は、それに続く『菊とギロチン』では世の中の弱者である女相撲の力士たちとアナキスト集団に焦点を当てた面白い物語を演出していたが、世の中の“弱者”に焦点を当てたのは本作も同じだ。したがって、本作では瀬々脚本が設定した3人の主人公の“その面”にしっかり焦点をあてながら、3人の主人公の生きザマと死にザマを考えたい。

■□■豪士の“弱者”ぶりは？そこへの共感度は？■□■

私は1949年に愛媛県の松山市で生まれ、その中心地で育ったが、それでも小学生の

時には地域コミュニティがあり、夏祭り、秋祭りになると神輿を担ぎ、浴衣姿で散策したものだ。本作の時代はそれよりずっと後だし、舞台も現在大きな社会問題になっている限界集落だが、それでも村祭りだけは活発らしい。そのため、本作には村祭りの風景が再三登場するが、そんな本作は、あの愛華失踪事件から12年後、豪士と紡が出会うところから物語が動き始める。豪士を演じる綾野剛は日本で一番カッコいい若手(?)俳優と言ってもいいほどのイケメンだから、本作の豪士役がピッタリかどうかはかなり疑問がある。また、母子共に村人から差別され、バカにされている豪士に紡が何の偏見もなく接することができたのは、2人とも「弱者」だという共通点で結ばれているため。瀬々脚本ではそれを言いたかったのだろうが、それだけの共通点でこの2人の心が結びついていくストーリーに私にはイマイチ納得感がない。

他方、第2の失踪事件が起きた時が、原作の『青田Y字路』でもハイライトだが、ここでは失踪現場に集まった村人たちが、老いも若きも「犯人は誰だ?」の妄想に駆られていく姿が映し出される。そんな時、一人の若い男が「やっぱり、あいつが怪しい!」と叫び、「あいつ」の疑わしさを説明し始めると、村人たちは・・・?日本人は今、「韓国人は感情的だ。一つの流れに流れやすい」等と批判しているが、私に言わせれば、その批判はそのまま日本人に当てはまる。そのことが、このシークエンスを見ているとよくわかる。「あいつ」とは、もちろん豪士のことだ。集団心理の恐ろしさは、ナチス批判や韓国人批判をしている日本人、とりわけ日本のムラ社会にこんな形で存在していることが、多少の誇張はあるものの、その後の村人たちが豪士宅へ襲撃する(?)姿を見ればよくわかる。家を逃げ出した豪士は一軒のそば屋に逃げ込んだが、これではそば屋も迷惑千万。しかし、状況が状況だけに、少しはコトを収める努力をしてもいいのに、そば屋の主人は豪士に対していかにも迷惑そうな、出て行って欲しいという表情を浮かべるだけだ。すると、それを見た豪士は?

その後の“悲劇”はあなた自身の目でしっかり確認してもらいたいが、外国人差別が根強いムラ社会では、また、何よりもワケがわからなくなり狂気を含んだ集団心理の中では、ホントにこんな弱者いじめが起きることに、ビックリ!

■□善次郎の“弱者”ぶりは?そこへの共感度は?■□

最初からムラ社会の中で異質な存在として差別されている豪士母子とは違い、Uターンして村に戻っていた善次郎は長老たちからの信頼も厚かった。そのため、善次郎は亡き妻への想いを断ち切れないものの、一人で黙々と養蜂業を営み、納得感のある生活をしていたはず。ところが、蜂蜜を使った村おこしの件で、彼の努力が裏目に出ると・・・?

その点の誤解を釈明するべく、善次郎が長老の家を訪れたのは当然だが、村八分とはすごいもの。1つの誤解の上に、更に尾ひれがつき、何と「善次郎は、村の水源を悪徳企業に売却しようとしている」との噂が流れていたから、もはや彼が身の潔白を証明するのは

難しいようだ。今の私のように職住接近の生活をしていると、そんなことは考えられないが、ムラ社会ではきっとそうなのだろう。しかし、善次郎はその後どうなったの？

それも、あなた自身の目でしっかり確認してもらいたいが、その後、善次郎が妻の思い出のみに浸って家の中に引きこもり、家の外には妻の服を着せたマネキンを立て並べるようになったという展開に、私は些か違和感がある。善次郎ってこんなに弱い男だったの？ また、豪士はいくら村が嫌でも容易に村から抜け出せなかったのはわかるが、善次郎ならいつでも家屋敷を売り払って他の土地に引っ越せばいいだけではないの？ 日本にはそれくらい自由はあるのでは・・・？ そこらあたりの納得感が得られないだけに、私にはその後善次郎が犯すことになる凶悪犯罪についても、イマイチ納得感がない。さて、あなたは？

■□■ 紡の“弱者”ぶりは？ やっぱり女は強い！？ ■□■

本作では2人の男のダメっぷりが目立つが、女主人公の紡は、“弱者”とはいいいながら反面の強さが目立つ。また、愛する孫娘を失った五郎の悲しみはわかるが、あの時、あの青田Y字路で紡が愛華と別れず、一緒に学校から家に帰ってさえいねば・・・？ そう思い悔やむ五郎の気持ちがわからないでもないが、その気持ちを何年もずっと紡にぶつけ、紡を敵視する五郎はいかにも大人げないと言わざるを得ない。柄本明はいい俳優だが、本作の五郎を見ていると、柄本明まで嫌いになってしまいそうだ。

紡は若いだけに、善次郎と違い自由に動けるのが取り柄。そのため、学校を卒業してすぐに東京に出て、青果市場での仕事を探し、一人暮らしを始めたのは大正解。いくら故郷とはいえ、あんなイヤな村とは縁を切つてしまえばいいだけだ。もっとも、愛華失踪事件から12年後、豪士と知り合い、あの日約束していたように、紡が豪士と会っていたら、ひょっとして「2人して村を出よう」という話しになっていたのかも・・・？ 豪士の内気ぶりみればその可能性は低いが、お互い心にキズを持った弱者同士の結びつきが豪士と紡の間にはあったから、ひょっとして・・・？

現実には、豪士が村人から第2の失踪事件の犯人だとして追いたてられた挙げ句、立てこもったそば屋でガソリンをかぶり焼身自殺する悲劇になったから、紡の心のキズが更に大きくなったのは仕方ない。しかし、そんなムラ社会だからこそ起り得るそんなバカげた事件によって、紡が1日も早くこの村から出て都会暮らしをしたいという決心も固まっただけで、ちなみに、村に残りながら紡への淡い恋心を持っていた野上広呂が、村の中で時々ちょっかいを出したのではダメだと理解し、思い切って東京に出て紡と同じ青果市場で働き始めたのは立派な決断。もっとも、そのことと初恋の成後は別物だということは、広呂が紡の心の中の痛みを理解する情緒に欠けていたことを考えれば当然だ。

本作のタイトルの『楽園』は、2人の男の生きザマと死にザマをみれば、いかにも皮肉タップリだが、紡の生きザマをみれば、なるほどそこには「楽園」にいけるかもしれないという“希望”を見出すことができるので、このタイトルにも納得！ やっぱり女は強い！？

■□■ 2人の女優の扱いは？少しかわいそう？ ■□■

本作で豪士の母親役を演じた女優は黒沢あすか。この母親は中国人？フィリピン人？それはわからないが、東南アジア系の女性だと推測できる。したがって、その日本語になまりがあるのは当然だから、そんなセリフ回しが必要な母親役は難しい。しかも、いくらまともに働いて一人息子の豪士を育てていても、村人からは差別され蔑視され続けている女の役だから、それを演じる女優は大変だ。しかして、この女優が『六月の蛇』（02年）で主演し、複雑で難しい人妻役を見事に演じた黒澤あすかだったから、私はビックリ！私は、その評論で、「すばらしいのは主演の黒沢あすか。一気に人気沸騰か。」と書いたほどだ（『シネマ3』359頁）。

もう一人、本作には善次郎に絡んで、夫と子供を一瞬の交通事故で失った女性・久子（片岡礼子）が村人の一人として登場する。この2人は年齢的にピッタリだから、互いに意識し合ったのは当然だが、その縁談話が普通に考えられるシンデレラストoryのように進んでいかないのが『犯罪小説集』という原作と瀬々脚本の特徴だ。善次郎が長老たちからの信頼を集め続けていれば、ひょっとしてそうなったのかもしれないが、事態は全く逆で、善次郎は家の中に引きこもってしまったから、久子が困惑したのは当然。そんな中、本作ではこの2人がひなびた温泉宿に泊まるシークエンスが描かれ、更にそこでは2人が男女混浴の温泉に浸るシークエンスが描かれる。善次郎の気持ちはともかく、久子が善次郎に好意を持っていることは、そこまでのストーリー展開で明らかだから、ひょっとしてここで・・・？そう思っていると案の定・・・？そして、また意外にも・・・？

いくら何でもこの瀬々脚本はやり過ぎでは？善次郎が何とも悲惨な犯行を執行した後の久子の人生はどうなるの？もちろん、本作はそれには全く触れていないのだから、そもそもこの久子に関するエピソードは不要だったのでは・・・？

2019（令和元）年10月28日記